

上海における結婚難の現状と要因：
「80 后」（バーリンホウ）女性とその母親たち

丁 奕春・黒須 里美

キーワード： 晩婚化、「80 后」（バーリンホウ）、一人っ子政策、インタビュー調査

要旨

中国都市における女性の晩婚化について統計とメディアからの情報を整理し、上海においてインタビュー調査を実施することから、結婚難の実態とその要因を探った。「80 后」世代の結婚は女性自身の高学歴化と高収入化により結婚に対する理想が高くなったことや、結婚式と新居を含めた結婚コストの上昇が大きく影響している。さらに一人っ子第一世代として、親との絆が強い分、親の結婚への干渉も大きい。中国特有の歴史文化的経緯があるものの、都市の女性の結婚難の実態は東アジアや日本の状況とも共通点が多い。

1. はじめに

いま、中国の都市における女性の間で結婚難が深刻化している。結婚したいのに、結婚できない女性たちは「余女」とまで称されている。若者の晩婚・未婚化が出生率の低下に大きく影響するという事は、東アジア諸国共通の現象であり、超少子高齢社会や人口減少を引き起こす社会問題となっている。中国都市の状況は東アジア、特に日本の晩婚・未婚化現象と共通するものがあるのだろうか。それとも、一人っ子政策によって巻き起こされた特有のものなのだろうか。

長年世界最大の人口を抱えてきた中国は 1979 年からスタートした「一人っ子政策」といわれる計画出産政策によって出生率を減少させた。1992 年には人口置換水準とされる合計特殊出生率 2.1 を下回り、1993 年以降 1.8 以下の低い比率を維持している（張萍 2009:1）。しかし、それが男児過多を生み、大きな社会問題となっている。男児選好を強調したための高い出生性比が結婚適齢期にも影響し、男性の結婚難が生じた。2015～2045 年の間に男性人口過剰は 15%以上になると予想され、毎年、約 120 万人の男性が結婚市場で結婚対象を見つけにくくなるといわれる（李樹茁 2006:8）。ここで問題になっているのは、結婚適齢期における男性余りの現象であるが、より詳しく地域的な違いをみると、それは農村部で大きいことがわかる。都市においては、男性の結婚難とともに、深刻な女性の結婚難という問題が浮上している。

本稿は、現在まさに結婚適齢期にある 1980 年代生まれ「80 后」（バーリンホウ）を中心とした上海の女性たちとその母親世代を対象にインタビュー調査を実施し、都市における結婚難の実態とその要因を明らかにする。「80 后」は一人っ子政策がはじまってからの第一世代で、中国の改革開放政策後の安定した成長経済下に育ち、親から溺愛され甘やかされている世代だともいわれる。本稿ではまず東アジア諸国の晩婚化の状況と、特に日本の未婚・晩婚化の要因から分析の視点を整理する。次に中国都市

における結婚の現状を人口統計と様々な調査を用いて明らかにする。それらをもとにインタビュー調査を実施し、「80 后」の未婚・既婚の女性たちやその母親たちが何を求め、何を考えているのか、彼女達の生の声から探り分析する。

結婚が社会を反映している一つの鏡であるとすれば、都市の結婚難を通じて中国社会の変化の一面を見いだせるのではないだろうか。中国における工業、経済、文化の一つの中心となった上海における結婚難の事例に着目することから、中国社会の変化の一端を明らかにすると同時に、東アジア諸国における結婚の変化の中に中国を位置付けることができるだろう。

2. 未婚・晩婚化の要因

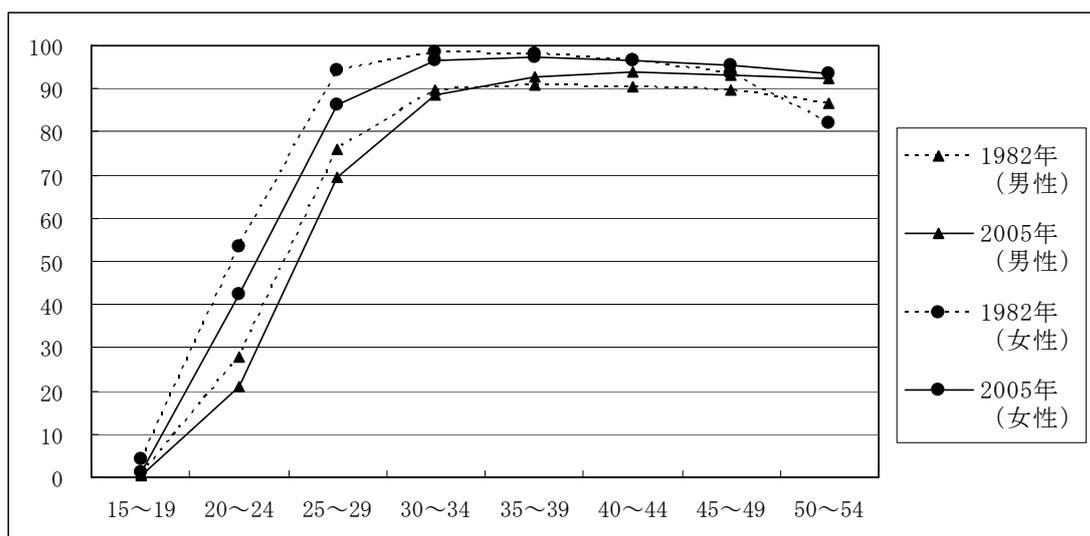
未婚・晩婚化は東アジア諸国に共通する現象となっている。同棲や婚外出産が非常に稀で、結婚が出産の前提である東アジア諸国においては、未婚・晩婚化は超低出生力社会を招く大きな社会問題となっている。なぜ未婚・晩婚化が生じているのか。日本における晩婚・未婚化の現状については人口学的要因、社会経済的要因、結婚規範、そして結婚市場という視点から多くの研究の蓄積がある。まず人口学的要因として1970年代からはじまった適齢期の独身男性の独身女性に対する相対的人口過剰があげられる(阿藤 2011:6; 河野 2007:174)。社会経済的要因として女性の高学歴化と社会進出がある。高学歴化は日本の若者のキャリアアップ及び経済力の上昇に貢献する一方、若い女性の同棲や初婚といったパートナーシップ形成を減少させた(津谷 2011:38)。結婚は女性の生きるための手段である必要性でなくなったと大橋(1993:33)はいう。この背景には規範の変化がある。阿藤(2011:12)は、日本が70年代以降、ジェンダー観が専業主婦型(性別役割)から共働き型(男女共同参画型)の方向に移り変わってきたことを指摘する。山田(2007:113)はパラサイト・シングル(親同居未婚者)と結婚の問題について考察し、パラサイト・シングルが増えているということが結婚を抑制させる一因となっていると主張した。若者の雇用の二極化が進み、フリーターや派遣労働者などが増え、若者の収入が不安定になり、親と同居すれば豊かな生活ができるという背景がある。こうして結婚は必ずするものという皆婚規範も、「結婚適齢期」規範も薄れ(黒須 1999:26)、若者の結婚が遅れるのである。さらに見合い制度が衰退する一方で、恋愛婚の市場が発達不全で十分に作動していないこと(河野 2007:178)、また職縁による出会いの減少を補填する職縁以外による男女の出会いの機会が増えていない(佐藤 2010:184)など、結婚市場の問題もあげられる。このような日本の未婚・晩婚化の要因と現在の中国都市の晩婚化の要因には共通性があるのだろうか。

3. 中国の都市における結婚難の現状と要因

まず中国における未婚化、晩婚化の実態を既婚率から見る(図1)。1982年と2005年における男女年齢別の既婚率を比較すると、男女どちらも晩婚化が進んでいることが明らかである。15-34歳時における既婚率は1982年より2005年のほうが7-10%低い。25-29歳においてもこの違いは明確である。しかし、30-34歳あたりから1982年と2005年の違いはなくなり、男女どちらも90%以上が既婚者となっている。35歳以上の男性では、1982年と比べ、むしろ2005年の既婚率のほうが高いくらいである。図1が示すのは、中国が今でも、だれもが一度は結婚する「皆婚社会」ではあるもの

の、若者の晩婚化が男女ともに進んでいるという実態である。この状況はかつて日本が「皆婚・早婚」から「皆婚・晩婚」となり、いまや「非皆婚・晩婚」(阿藤 2011)となっている段階的変化をたどっているようにも見える。

図 1 中国における男女年齢別の既婚率(初婚或いは再婚)(1982年と2005年)



『中国人口結構問題』 李建新 (2009 : 97) より作成

この状況を都市と農村部で比較してみよう。表 1 は中国における 2000 年と 2005 年の農村・非農村別、男女別未婚率を示している。20-24 歳女性の未婚率を見ると、2000 年の 20-24 歳の未婚率は、農村では 51.2%、非農村では 71.7% である。2005 年の数値でみると、農村の未婚率は 51.4%、非農村の未婚率は 75.2% である。都市の 20-24 歳未婚率は農村の女性より 20% も高い。さらに 20-29 歳グループでこの 5 年間に非農村女性の晩婚化の進みが大きい。男性においても非農村で未婚率が高いが、農村と非農村との違いは女性ほど大きくない。また 30-34 歳を境に未婚率は逆転し、35 歳以上では、農村男性の未婚率が非農村男性の未婚率の 3 倍となっている。

表1 中国における農村・非農村別、男女別未婚率

	年齢	男性		女性	
		2000	2005	2000	2005
農村 戸籍	15～19	99.65	99.68	98.58	98.43
	20～24	74.35	75.33	51.18	51.42
	25～29	21.81	25.93	6.48	9.09
	30～34	7.51	9.73	0.88	1.39
	35～39	4.65	5.23	0.30	0.39
	40～44	4.72	3.78	0.10	0.20
	45～49	4.95	4.20	0.10	0.13
非農村 戸籍	15～19	99.97	99.88	99.75	99.62
	20～24	87.85	89.28	71.67	75.21
	25～29	32.23	38.25	14.09	20.58
	30～34	7.04	10.22	2.73	3.94
	35～39	2.69	3.47	0.92	1.67
	40～44	1.57	1.73	0.68	0.76
	45～49	0.97	1.24	0.40	0.54

出典：「中国当前的婚姻態勢及变化趨勢」『河北学刊』張翼 2008年 第3期
<http://www.docin.com/p-124746679.html#>

少し時代をさかのぼってみると、中華人民共和国が成立してから、これまで4回の「独身危機」(結婚適齢期を過ぎた人々の結婚難)があったと一般的に理解されている。「独身風潮」、「独身波」といわれている。虞萍(2008:84)によると、1回目の危機は50年代初期である。1950年(中華人民共和国が成立した初期)に婚姻法が公布され、結婚と離婚の自由が提唱された。それとともに、全国で「離婚風潮」が起こり、大勢の人が無配偶の状態に戻った。2回目の危機が発生したのは70年代の末、「文化大革命」が終わった後に始まった。文化大革命中の「上山下郷運動」⁽¹⁾によって当時、一部のインテリ男性は農村で地元の女性と恋愛して結婚した。一方、都市部のインテリ女性は農村部の男性を受け入れず、結婚適齢期の未婚女性が増えた。3回目の危機は1990年から2000年までである。80年の初期から「改革開放」という政策が実施され、生活の水準が高くなるとともに、結婚より、自由で気楽な独身生活を追求する若者が多くなったとされる。特に、都市部にこのような状況が多かった。1回目と2回目の「独身危機」が歴史や政治など環境的な要因で未婚者が増えた状況に反して、3回目の「独身危機」は本人の意志に基づいている。「受動的独身」から「自発的独身」に変化したことが注目される。この状況は更に都市における晩婚・未婚化の現象をもたらした。それが、近年、中国の都市における4回目の「独身危機」である。これは3回目の「独身危機」の続きであり、晩婚・未婚化の現象がさらに進んだとされる。

杜双燕(2008:49)によると、4回目の危機には4つの特徴があるという。(1)独身年齢層が28-38歳に集中している、(2)高学歴、高収入、高社会的地位の優秀な人が多い、(3)男性より、女性が多い、(4)集中している地域は上海、北京、広州などの大都市である。都市における結婚コストが原因で若者が結婚を遅らせたことが4

回目の危機を形成した主な要因であるとしている（杜双燕 2008：51）。その4回目の危機に結婚適齢期を迎えているのが1980年代に生まれた「80后」（バーリンホウ）を中心とした年齢層である。その彼らの結婚動向をメディア（新聞・雑誌・WEBサイト）から探ると3つの特徴が浮かんでくる。

1つ目は「無房不婚」である。中国人にとって、結婚時の「三種の神器」は80年代の「自転車、ミシン、腕時計」から90年代の「カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機」、更に現在の「家屋、家屋の内装、車」に変わった（虞萍 2008：87）。新居の購入は結婚時に不可欠で必要なことだと思っている若者が多い。特に、若い女性の中で結婚相手が新居を買ってくれなければ、結婚しないという人が多い。しかし、2004年～2006年の間に家屋の価格は急激に上昇し、その後も徐々に上昇し続けている。2007年における全国の家屋の価値は1998年より92.9%上がった。「光明網」というニュースサイトのデータによると、2010年に上海における家屋の価値と平均一人当たりの年収の比率は82：1である。いわば上海市民は82年間働きつづければ家屋が買え、25年間働きつづければ、頭金が払えるということである。2011年の「中国大中都市青年住宅状況調査」によると、24.8%の都市にすむ若者は新居購入のプレッシャーのために結婚を遅らせた。しかし、また67.4%の若者は結婚時、家を借りることもよしとしない（『黒龍江金融報』2011年 第6期）。このような状況のなかで「80后」たちは新居の購入を親に負担してもらうことが普通になった。

2つ目は都市における「余女」の氾濫である。「余女」という言葉の初出はネットであるが（鄧森 2011：8）2007年の中国教育部の新語解釈では、「余女」は、結婚適齢期を過ぎててもまだ、独身でいる「三高女性」（高学歴、高収入、高年齢）としている。曹雪梅（2010：2）によると、「余女」は「三高」という特徴があるうえに、大都市に住んでおり、結婚の希望を持っている。しかし、「理想の男性に出会わなければ、決して嫁にはいかない」と、いわば「結婚待ち」状態といわれる（虞萍 2008：85）。

3つ目は「父母相親団」である。「光明網」などのニュースのサイトは、上海中心部にある人民公園で組織される「相親角」（見合いで集まる場所）で近年にぎやかさが増していると報告している。はじめのうちは数十人であったが、今では数千人規模の見合いになった。「相親角」へ結婚相手を探しに行くのは当事者ではなく、親たちである。親たちが子どもの将来を心配して、子どもの代わりに親同士の見合いをし、お互いが気に入ったら、子ども同士の見合いに進む。これが「父母相親団」である。毎週末、数千人の親たちが「相親角」に集まり、提灯に見合いカードを貼り、自分の子どもの長所を売り込みながら、結婚相手を探す。見合いカードの情報をみると、「80后」が多数を占め、男性より、女性が多い。その中で「三高女性」も珍しくない。親たちは見合いカードを見て双方の子どもの容貌、収入、家屋や車の所持の有無などを中心として面談する。女性側は本人の写真を貼っている見合いカードが人気であり、男性側は結婚のための新居を準備したことを書いた見合いカードが人気になっている。中国新聞網によれば、「父母相親団」は親たちが子どもの結婚に焦る状況を象徴しているという。一人っ子は親との関係が緊密であり、親たちが子どもの将来へ介入するという時代が始まったと指摘する。

次にこの状況を2011年に中国の結婚情報サイト（百合網）が実施したアンケート調査結果から見てみよう。「百合網」は中国で一番人気のある結婚情報サイトである。「百合網」がネットで恋愛・結婚観に関してアンケート調査を実施し、「2011年中国人婚

恋状況調査報告」を公表した。インターネットがつかえる環境がある人や結婚情報に興味がある人が調査対象者という選択性に注意が必要である⁽²⁾。しかし、それゆえに実際の回答者は上海、北京、広州など大都市が中心であり、政府による調査資料へのアクセスが難しい中国都市における結婚意識を明らかにする貴重な調査結果であるともいえる。

調査報告をみると、「恋愛婚」が現在の結婚の主流である。結婚する理由（複数回答可）について、多くの女性回答者は「愛情のため」（70.5%）、「将来二人で互いに支えあえる」（66.9%）と答えている。そのほか「結婚適齢期だから」（50.2%）、「寂しさから逃れるため」（44.6%）「家を継ぐため」（16.2%）と続く。男性の結婚理由の優先順位も女性と同じであった。「結婚適齢期」について、女性は25-27歳（63.4%）に集中し、男性は28-30歳（49.9%）に集中している。また、「男性の結婚適齢期」は男女どちらの回答も25-35歳であったが、「女性の結婚適齢期」に関しては、女性回答者が25-30歳、男性回答者は20-27歳と男女で理想とする女性の適齢期の年齢幅が大きくずれていた。

男女の意識差は結婚適齢期のみだけではなく、結婚相手の条件からもうかがわれる。「人柄・性格以外で大切なもの」（複数回答可）は、男女どちらも「愛情」が1位であった（男性68.4%、女性63.9%）が2位以降は大きく違った。女性は結婚相手の仕事（56.2%）や経済力（46.9%）を、男性は結婚相手の外見（55.3%）や共通の趣味（45.5%）をあげた。さらに結婚相手に求める経済条件についての質問では、過半数の男性が女性に「安定した収入」と答えたが、女性は「安定した収入」だけでなく、「結婚時の新居」という回答も多かった。新婚時に新居を購入する負担の質問では男女ともに回答傾向は同じで、「経済力の高いほうが多く負担する」（男女で44.0%）、「男性側が頭金を負担し結婚後のローンを夫婦で分割」（25.7%）、「男性側が全額を払う」（18.8%）と続いた。

メディアやアンケート調査にあらわれた実態とその背景をより詳しく理解するために、以下ではインタビュー調査を利用して、上海の女性たちの生の声から、中国の都市における晩婚化・未婚化の実態を探求する。

4. インタビュー調査

インタビューの調査対象は30歳前後の女性10人（未婚者5人、既婚者5人）、50-60歳の母親世代の女性5人（全員が既婚者）、合計15人である。30歳前後の女性たちは1980年代に生れた「80后」が中心である。3節で述べた4回目の独身危機の特徴の一つとされる独身年齢層の28-38歳にあたり（杜双燕2008：49）、高学歴、高収入、高年齢といういわゆる「三高女性」である。30歳前後の調査対象は全員が上海のToastmaster Clubという英語講演Clubの会員である。Toastmaster Clubの会員の多くは高学歴・高収入のホワイトカラーである。また、50-60歳の女性は「80后」たちの母親世代にあたる。一人っ子第一世代の母親たちとして、自分の子どもが結婚難に直面せざるを得ない現象をどう考えているか、また彼女たちの結婚経験とも比較しつつ、親世代の視点からも現在の結婚難の原因を探る。インタビューの人数や代表性についての制約は否めないが、アンケート調査やメディアの描く都市女性の結婚観を検証し、さらに結婚をめぐる未・既婚者の様々な思いと実体験に迫る手掛かりとなるであろう。

調査対象者の年齢、きょうだいの有無、出身、最終学歴、職業、子どもの有無(未・既婚)は以下のとおりである。

<30歳前後の未婚者>：

- Aさん：26歳、一人っ子、上海、大学の専攻はプログラミング。
- Bさん：27歳、一人っ子、上海、修士、会社の人事課で働く。
- Cさん：30歳、一人っ子、上海、学士、銀行に就職、営業部の主任。
- Dさん：32歳、一人っ子、上海、学士、銀行で働き、経理課の主任。
- Eさん：36歳、妹が一人、上海、学士、会社のマーケティングマネージャー。

<30歳前後の既婚者>：

- Fさん：27歳、一人っ子、上海、学士、高校教師。
- Gさん：30歳、一人っ子、上海、学士、会社行政主任。子ども一人。
- Hさん：31歳、一人っ子、大連(2006年から上海)、修士、会社事業部主任。
- Iさん：32歳、一人っ子、上海、学士、会議計画者、子ども一人。
- Jさん：34歳、一人っ子、上海、学士、広告デザイン。(夫は上海で働くアメリカ人)

<50-60歳の既婚者>：

- Kさん：54歳、上海、退職、27歳の娘一人(既婚)。
- Lさん：55歳、上海、退職、29歳の息子一人(未婚)。
- Mさん：55歳、上海、退職後パート労働、28歳の息子一人(既婚)。
- Nさん：56歳、上海、退職、28歳の娘一人(未婚)。
- Oさん：60歳、上海、退職後パート労働、30歳の娘一人(未婚)。

インタビュー調査は2012年8月の中旬に、上海のToastmaster Clubの会場で講演活動後に行った。活動の終了時間は午後9時半であった。時間の制限があったため、10名30歳前後の女性は二人1グループにして、1グループは20-30分行った。50-60歳の調査対象は人数が少ないので、一人ずつ20-30分のインタビューを実施した。

以下の項目を中心にインタビュー調査を実施した。インタビュー項目は未婚者と既婚者で分けている。

<未婚者へのインタビュー項目>：

- (1) 結婚意識・結婚年齢について
 - a. 結婚するつもりがあるか。
 - b. 適当な相手がいなければ結婚しなくてもいいと思うか。
 - c. 理想の結婚年齢は何歳だと思うか。
- (2) 結婚相手の選択条件と親の影響
 - a. 結婚の相手を選択する時、一番重要なことは何か。(1、2、3番目)
 - b. 結婚の相手を選択する時、親の意見を聞くか。その理由は。
- (3) 結婚式、新居購入における金銭的分担
 - a. もし結婚する時、新居を購入するか。その資金は男女どちらが負担するか。
 - b. もし結婚する時、結婚式を挙げるか。その資金は男女どちらが負担するか。
- (4) 夫婦の役割
 - a. 結婚したら、夫婦の役割をどう分担するか。
 - b. もし子どもを産んだら、子育てと仕事をどう両立するか。

<既婚者へのインタビュー項目> :

- (1) 結婚意識・結婚年齢について
 - a、結婚は絶対にすべきことか。
 - b、もう一度選択できたら、独身のままがいいと思うか。
 - c、理想の結婚年齢は何歳だと思うか。
- (2) 結婚相手の選択条件と親の影響
 - a、結婚の相手を決めた時、一番重要なことは何だったか。(1、2、3番目)
 - b、結婚の相手を決めた時、親の意見を聞いたか。その理由は。
 - c、子どもの結婚相手に、一番重要なことは何か。(1、2、3番目)
- (3) 結婚式、新居購入における金銭的分担
 - a、結婚する時、新居を購入したか。その資金は男女どちらが負担したか。結婚式を挙げたか。その資金は男女どちらが負担したか。
 - b、子どもが結婚した(する)時、新居を購入した(する)か、結婚式を挙げた(挙げる)か。その資金は男女どちらが負担した(する)か。
- (4) 夫婦の役割
 - a、結婚後、夫婦の役割をどう分担しているか。
 - b、子どもを産んだ時、子育てと仕事をどう両立した(する)か。
 - c、将来孫の面倒をみるつもりがあるか。

インタビューの結果は30歳前後の未婚者、30歳前後の既婚者、50-60歳の既婚者という3つのグループにわけて主な結果を示し、各グループ内での共通点と相違点などを比較する。

(1) 結婚意識・結婚年齢について

30歳前後の未婚者全員が一生に一度は結婚するつもりがあると回答した。結婚は愛する人と一生を共にすることである。Bさんが「結婚とは、愛する人と一生を共にすることだ」と考える。愛情がない婚姻は想像できない」というように「自由恋愛」「自由結婚」が大切である。また、結婚は人生の中で、あって当然とされるイベントであるものの、適当な相手がいなければ結婚せず、独身という生き方を認めるということがわかった。特に、Cさんのように「結婚したいが、結婚が人生の全部ではない。いい人がいなければ、独身の生活も楽しいと思う」という意見に賛成する人が多かった。

女性の結婚年齢についてはみな「28歳」と答えた。28歳は社会に進出して何年間か経っているため、物事に対する考えが成熟している。また女性の理想的な出産年齢を考えて、30歳前後に子どもを産むというのがよいという声が多かった。例えば、Eさんは「社会に進出した若者は、未熟なので、すぐ婚姻生活に入るのは将来の生活に不安定をもたらす。また理想的な出産年齢を考えると、28歳で結婚して30歳前後に子どもを産むといい」という。また、28歳で結婚できない場合でも30歳前には結婚したいというのはAさんをはじめ多くの女性の答えであった。理想的な結婚年齢が出産年齢を考えて明確にイメージされていることが分かった。

30歳前後の既婚者はみな、結婚は「絶対にすべきことではないが人生の中で一番重要なイベント」と答えた。結婚は当然なことで、もう一度選択できても独身を選ぶという回答はなかった。結婚年齢に関しては、未婚者と同じ28歳であった。しかし経験を積むにつれて、理想が25歳から28-30歳に変わった女性もいた。例えば、Hさんは

「20歳の時、私は25歳になったら、結婚したかった。しかし、現実の生活の中で25歳の時彼氏がいても、大学院生として経済力がなく、結婚後の生活を負担できなかったので、結婚するのはありえないと思った。なので、30歳前に結婚したいと思っていた」という。Hさんの状況のような女性は少なくない。現実の状況から、理想の婚期を延ばさざるをえないのである。

同年代の未婚者のように「結婚は個人の自由」と考えている傾向は強い。しかし、「結婚して親を安心させる」という答えもあった。今年結婚したばかりのFさんは「今の生活に満足している。独身の時に比べて、今はもっと忙しいけど、悩んでいる時に、夫は応援してくれるので、幸せだと思う。一人っ子の私がいい人と結婚して、親は私の将来に安心したと言っている」という。また、Gさんは「もう一度選択できたら、また結婚する」というものの、「29歳で結婚して、30歳になって、子どもを産むのがいいと思う。27歳の時、経済の基盤は弱かったので、町に住む夫の親が少し金銭的援助をしてくれた。結婚したばかりの時は大変だった」と振り返った。

その他、結婚する前に「同棲」、いわゆる「試し婚」をしたほうがいいという意見もあった。Jさんは「結婚は独断で決定できることではない。「80后」は結婚する前までずっと親と一緒に暮らしているのだから、二人暮らしはどんな生活かとイメージしにくい。まず、独立して一人暮らしをするべきだと思う。その後、結婚する前に、二人で同棲して、二人暮らしを体験したほうがいい」と話していた。同棲に対して寛容な態度がみられた。

50-60歳の既婚者にとって、結婚は「一生の中で絶対すべきこと」また「当然なこと」であった。もう一度選択できても、また結婚したいと答えた。例えば、Kさんは「結婚しない人生は完璧な人生と言えない」といった。理想的な結婚年齢はみな「25歳」と答えた。Oさんが「若い時に子どもを産んだほうがいいことを考えて」と言うとおりに、女性が結婚年齢を考えるとことは出産年齢を考えることのようなものである。

(2) 結婚相手の選択条件と親の影響について

30歳前後の調査対象者は未婚既婚にかかわらず、結婚相手が持つべき条件は(a)人柄 (b)二人の気が合うことと性格の良さ(思いやり、理解してくれること) (c)愛情という3つをあげた。二人の気が合うことを重視しているが、同時に相手の思いやりや理解を強調している。Eさんの話しによると、「二人の気が合うこと」というのは自分と似た世界観や価値観などのことである。「以前、親が紹介してくれた男性はいい人だったけど、デートの時小さいことで口論した。例えば、二人でどこへ旅行に行くとか、誕生日に高級レストランに行くべきかどうかなど。冷静になって考えてみたが、喧嘩の原因は二人の価値観の違いだと思う。恋愛する時、摩擦が多かったから、結婚したら、もっと辛いと思う。だから、別れた」と語った。また、結婚相手を決める時「仕事や経済的能力」は重要なことではない。例えば、Bさんは「人生、お金より大切なものがたくさんある」と言っていた。相手の仕事や経済力は重視せず、自分と同じくらいのレベルがいいとも答えた。

親の影響について、30歳前後の女性たちは未・既婚にかかわらずみな、結婚相手を決める(決めた)時、親の意見を聞く(聞いた)と答えた。それは「結婚する時、親の祝福をもらいたい」からであり、また「自分より親の人生の経験は豊富」だからである。例えば、Aさんは「私の元彼氏は大学の友達だ。いい人だと思ったが、親から

反対された。親は、彼が農村から上海に来ているため、上海で新居を買うのは高くて難しく、結婚後生活のレベルが低くなると心配した。親は私に家柄のつりあう人と結婚してほしいという。私は彼と付き合いを続けたかったが、彼と結婚したら、親の祝福をもらえないと思うとストレスが大きすぎて、結局別れてしまった」と回答した。30歳前後女性たちの多くは「自由結婚」を前提としているにもかかわらず、親の意見を聞き、親の許しを得た上で、最終的な選択をする傾向があるようだ。

50-60歳前後の調査対象者にとって、自分の結婚相手が持つべき条件は(a)人柄(b)性格の良さ(積極的、真面目)(c)相手の出身であった。母親世代の結婚は、結婚相手の出身も重要であった。80年代前後、結婚相手として共産党員、軍人、労働者、党や国家機関の正規職員などプロレタリアートが好まれた。これに対して、商人や会社の社長などブルジョアジーは出身がよくないと見られていた。Nさんは「私は真面目で、積極的な男性が好きだ。真面目な人は頼りになると思う。80年代の頃は出身、社会関係、本人の政治的地位がよくない人は、真面目で頼りになると思われていなかった。結婚しても家族に不安をもたらすと思った」と答えてくれた。

自分の子どもが結婚相手を選択する時、相手が持つべき条件は(a)人柄(b)性格の良さ(思いやり、理解してくれること)(c)安定的な生活が送れる環境であった。一部は子どもの結婚相手の家柄も要求していた。母親世代は自分自身の結婚相手の条件に「経済力や学歴」を挙げなかったものの、自分の子どもの結婚相手には「経済力や学歴」を要求している。例えば、Oさんは「80年代の初期は計画経済の時代なので、収入が平均的で生活のレベルでも格差がない。それで、私は結婚する時、結婚相手の経済力や学歴は必要なことではなかった。でも、今は経済力の違いは生活のレベルを決める。上海ではいい職業を持てば、いい生活ができる。だから子どもが安定した生活ができるように、結婚相手の仕事や経済的能力は重要なこと」だという。結婚後に子どもの生活水準が低くならないように親たちは願っている。

(3) 結婚式、新居購入における金銭的分担について

30歳前後の未婚者5名の調査対象者中4人は結婚式の費用をふたりで分担するつもりと答え、1人は経済力の高い方が負担した方がいいと答えた。また、未婚者全員が結婚後両方の親と別居することを希望し、男性側が新居を提供することを理想と思っているが、女性側が新居を提供することを認めている女性もいた。新居の購入は一方が先に頭金を支払い、結婚したらローンの部分はふたりで分担したいと考えている。頭金の分担に関して、2人は経済力の高い方が支払うと答えたが、3人は男性側が支払うのが理想だと答えた。Dさんは「伝統的結婚では結婚式の費用や新居の提供は男性側の責任。でも、現在の社会は男女平等なので結婚式の費用はふたりで分担するのが合理的だ。親が家屋を持っているので、もしいい結婚相手に出会えば、私の方が新居を提供してもいい」という。Eさんは「結婚する時、結婚式は必要だが、新居の購入は経済力の高い方が頭金を支払うのが合理的だ」という。結婚式の費用は分担し、新居購入は必ずしも必要ではないが、購入するならば必ずしも男性でなく、経済力の高い方が頭金を支払い、結婚したらローンはふたりで負担するという柔軟な意見もみられた。

30歳前後の既婚者では、結婚式を挙げていない1人を除いて、4人の結婚式費用はすべて男性側が負担した。結婚時みな親とは別居した。2人は賃貸である。3人は新居

を購入して頭金は男性側が支払い、結婚後ローンはふたりで分担する予定であったという。しかし現実には、男性側の経済力がまだ低いため、親に負担してもらうことが多い。例えば、Gさんは「結婚する時、夫と1LDKの新居を買うことを決めた。新居のローンの頭金は夫の親に払ってもらい、残った部分は結婚後、二人で一緒に分担している。部屋は狭いが、自分の家だ」と話した。

50-60歳の既婚者は全員が結婚式を挙げて、結婚式の費用はすべて男性側が負担した。4名の調査対象者の新居の提供は男性側が負担し、結婚後男性の親と同居した。1名の調査対象者は結婚後、5ヶ月のみ家屋を賃貸して、その後男性の親と同居した。母親世代の結婚の時は計画経済時代で家屋の売り買いは禁止されたので、新居を購入することができず、夫の親と同居することは一般的なことであった。

自分の子どもたちの結婚について聞くと、既婚の子どもをもつ2人は、すでに結婚式を挙げ、その費用はすべて男性側が負担したという。また新居について頭金は男性側が支払い、結婚後ローンは子ども夫婦がふたりで分担していると答えた。未婚の子どもをもつ親たちもみな、子どもに結婚式を挙げて欲しいと願い、その費用は男性側が負担することを希望している。

子ども夫婦とは離れて住むことを希望しているが、近くに住んで欲しいという人が多い。子ども夫婦の家の家事や孫の面倒をみたいという母親が多いからである。例えば、Mさんは「今、上海で子どもは結婚したら親と同居することは少ない。息子が結婚する時、私の家の近くで新居を買ったが、その頭金は私と夫が支払った。上海で嫁をもらう時、結婚式の金銭や新居購入の頭金は男性側が負担するのが習慣だ。子どもが独居してお互いに自由になった。将来、孫ができれば、面倒をみるにも便利だ」という。

さらに、娘が結婚相手を決める時、新居を買うことのできる男性が理想と思っている親が多い。たとえばNさんは「伝統的な習慣では結婚時に男性側が結婚式や新居購入を負担する。新居の購入は男性側が支払うことが理想だ。しかし、現在の家屋の値段が高いので、もし娘の結婚相手の経済力が低ければ、結婚式の費用は男性側に負担して欲しいが、一部分の新居購入の頭金を分担したい」という。

50-60歳の調査対象者は自分の結婚の時より、子どもの結婚に対する経済的ハードルが高くなっているようである。

(4) 夫婦の役割について

30歳前後の未婚者はみな結婚後仕事を続けるつもりがあり、「夫婦二人でお互い家事を分担すること」を希望している。家事の分担の割合については「男女を問わず時間に余裕がある方が多めに家事を分担すること」という意見であった。また、みな子どもをもうけたいが、5人中4人は出産後3-4ヶ月休んで仕事を続けると答えたが、Eさんは夫の収入によって仕事を続けるかどうかを決めると答えた。回答者のなかで唯一きょうだいのいるEさんは「結婚後は共働きで、夫婦で家事を分担すべきだ。でも、子どもを産んだら、働き続けるかどうかは夫の収入によって決めたい。私の親は年を取っているし、妹は1歳の子どもがいるので、もし私も親に子どもの面倒を頼れば、親は疲れると思う。そのため、もし将来の夫の収入が高ければ、仕事を辞めたい」と語った。

さらに、将来的に双方の親から子育ての援助をしてもらうことを希望している未婚

者も多い。「結婚しても、子どもを産んでも、働き続けたいと思う。今の仕事は好きで年収も高い。もし辞めたら、惜しい。結婚後男性が家事をやることは当たり前だ。夫婦二人のどちらか時間に余裕があるほうがやればいい。また、結婚した私の友達は子どもの面倒を自分の親にみてもらっている。私もそうしたい」とCさんは言う。要するに未婚女性たちは結婚してからも、出産してからも家庭と仕事を両立させたいという意欲があるようだ。そのために結婚後夫婦共働きで家事は夫婦で分担し、双方の親に家事や子どもの面倒を見てもらうことを希望している人が多い。

30歳前後の既婚者はみな結婚後も仕事を続け、また夫婦二人で家事を分担しているという。5人中3人は双方の親に家事を手伝ってもらっているようだ。たとえばFさんは「両方の親が日常50%くらいの家事やってくれていて、残った50%を私と夫で分担している。例えば、毎日晚ご飯は私の親に作ってもらっている。毎週の土曜日に夫の親は私たちの家へ掃除に来てくれる」という。また夫婦二人の中では妻（自分）の方が家事の負担が大きいというHさんは、「夫は仕事が忙しいので、60%くらいの家事は私がやっている。両方の親はほかの町に住んでいて手伝いをしてもらえない。働いている私にとって大変だ」と語った。

子どもがいる2人の女性はどちらも親に子どもを預けて働き続けている。1人は平日に子どもを自分の親に預け、土日に子どもを迎えに行き、週末のみ子どもと家で過ごしている。もう1人は毎朝自分の親に子どもを預け、夜、子どもを迎えに行く。Iさんの夫の親は台湾に住んでいるので、結婚後親に手伝って欲しいと考えて、自分の親の家の近くに新居を買ったという。

子どもがいない3人はみな子どもをもうける予定である。3人中2人は子どもを産んでもずっと働きつづけたいと回答した。1人は子どもを出産した後に一度仕事をやめ、子どもが幼稚園に入って再就職すると答えた。Hさんは「子どもを産んだら、仕事を辞めたい。両方の親がほかの町に住んでいるので、子どもの面倒を頼むことはできない。それで、子どもを産んだら3、4年くらい仕事をやめ、幼稚園に入ったら再就職をしたい。再就職したら、お手伝いさんを雇用して家事を手伝ってもらおう」と言っていた。また、現在子どもがいない2人も、将来両方の親に子どもの面倒をみてもらって、仕事を続けることを希望している。Fさんは「物価が高い上海でやっぱり妻は収入があれば、生活の余裕がある。それで、仕事を続けるために、子どもが小さい時に近くに住んでいる親に面倒を頼みたい」という。またJさんは「親に少しだけ子どもの面倒を頼み、あとはお手伝いさんを雇用して頼みたい」という。Jさんのアメリカ人の夫は、自分の親が自分たちの家庭に入ってくことに違和感を持つようだ。Jさんの特別なケースは別として、インタビュー対象者の「80后」たちが結婚後、親から援助をもらうことを当然としていることは明らかである。

では50-60歳女性たちはどうか。彼女たちはみな結婚・出産してからも働き続け、夫婦二人で家事を分担しているという。自分たちの子ども夫婦については、子どもが結婚している2人はどちらも子どもの日常の家事を手伝っている。子どもが未婚の3人は将来子どもが結婚したら、日常の家事を手伝うつもりがあると答えた。また全員が将来孫の面倒を見るつもりがあると答えた。

30歳前後の調査対象者と同じように50-60歳の女性にとっても夫婦二人で共働き、家事を分担するのは普通なことである。しかし伝統的な習慣からやはり家事の分量は女性側の方が多い。例えばOさんは、「中国人は家を管理する責任は女性の方という

習慣がある。夫は家事をしてくれているが、60%の家事は私がやっている。80年代は収入が平均主義だから、今の若者に比べて職業の競争がなく、残業もなく、家事をやる時間が多かった」という。

子育てについては5人中4人が子どもが小さい時は夫の親に手伝ってもらった。例えば、Lさんは「私の子どもが小さい時だけ夫の親が手伝ってくれた。親は子どもが多いから、私だけが沢山の面倒を頼んだら、他の兄弟は怒ったかもしれない」といっていた。

さらに自分たちの子ども夫婦についてはみな、子どもの結婚後、日常の家事を手伝うということは当然であり、孫の面倒をみるのが老後の生活の一部だとしている。例えば、Kさんは「娘と娘婿は仕事のために、毎日遅く家に帰って、晩ご飯を作る時間がない。それで、私は毎日娘の家にご飯を作りに行っている。また、もし孫ができれば、夫と相談して短期間でも娘の家に泊まって援助したい。年を取ったら娘に面倒を頼みたい。将来、今住んでいる家屋を売って、娘に近いところに家屋を買って住みたい」とまで言っていた。一方、未婚の子をもつOさんは「将来、娘が結婚したら、近くに住んで欲しい。毎日娘と娘婿と一緒に晩ご飯を食べて話すのは楽しい。孫ができれば、面倒を見て一家団らんの楽しみになる」と語った。このように親子の関係が緊密であり、「80后」の女性たちの母親たちも、子どもの将来へ介入することを当然と思っていることが判明した。

5. 分析と考察

上海における未婚・既婚の「80后」を中心とした30歳前後の女性とその母親たちを含める15人へのインタビュー調査から、都市の「80后」女性に特有な高学歴と高収入、緊密な親子関係、そして伝統的な結婚文化が大きく上海の結婚市場に影響していることが明らかになってきた。上海の未婚「80后」女性たちはみな一生に一度は結婚するつもりがある。この意味では親世代から続く「皆婚社会」は健在である。理想の結婚年齢は、親世代は25歳、「80后」世代（未婚・既婚ともに）は28歳という回答であった。3歳の違いは高学歴化と晩婚化が進んでいる象徴ではあるものの、現在でもかなり出産年齢を意識していることがわかる。せめて30歳前には結婚したいという「80后」女性たちの答えから、中国都市においても「結婚＝出産」という考えが強く残っていることがうかがわれる。しかし、適当な結婚相手がなければ、独身でいい人を探し続ける「結婚待ち」という傾向も明らかである。実際にインタビューをした未婚者のうち3人は30歳を超えて「結婚待ち」状態であった。また「自由恋愛」、「自由結婚」の風潮が強い現在、「80后」たちにとって結婚とは愛する人と一緒になることが当然である。しかし同時に結婚は親を安心させるためにするという考えも強い。

結婚相手についてはどちらの世代も「人柄」が大切である。しかし、人柄の次に大切な条件を聞くと、「80后」女性たちはお互いの思いやりや理解をあげ、世界観や様々な価値観を含めて二人の気が合うことを強調した。中国人にとって、婚姻は今なお共に白髪になるまで添い遂げることであるため、一生を暮らす人とのコミュニケーションを重視することは当然なことなのだ。また、「80后」女性たちは愛し合っているということも大切な条件としてあげたことは「恋愛婚」の風潮を象徴している。一方、母親世代は不安な社会の下で生活がよくなるように、二人で努力する夫婦像があったためか、相手が積極的、真面目であることや出身も重要な条件であった。しかし、母

親となった現在、自分の子どもの結婚相手に求めるのはやはり、思いやりや理解であった。人柄や性格に関する結婚相手の条件の背景にあるのは相手の仕事と経済力である。「80 后」女性たちはせめて自分と同じレベルの仕事と経済力を求めているし、母親たちも自分の子どもが結婚後に安定した生活を送れる経済力があることを重要視している。

この経済力という視点で、まず問題となるのが結婚式と新居購入における資金である。中国の伝統的な結婚の風習では男性側が嫁をもらうので、結婚式の金銭や新居の提供は男性側が負担するのが当然である。親世代のインタビューからは結婚式の費用は夫に負担してもらったが、結婚後は夫の親と同居するのが一般的であったことが明らかになった。しかし、母親たちは自分の子どもが結婚するときは別居を希望している人が多い。そのため、娘が結婚相手を決める時、新居を購入することのできる男性が理想と思っている。インタビューをした「80 后」女性たちもみな結婚後に双方の親と別居することを希望しているし、またそうしている。結婚式や新居購入の頭金は男性側が支払い、結婚後ローンの部分は夫婦で分担したいという希望が強かった。しかし、既婚者の現実には経済力がまだ低いため、親に金銭的な援助をしてもらっている場合が多かった。

親からの援助は家事や子育てにも及ぶ。上海ではいつの時代も、女性は結婚・出産してからも仕事を続け、夫婦二人で家事を分担してきた。これは、上海の地からスタートした工業化によって女性労働者が増え、「キャリアウーマン」という歴史が上海から始まったことからすると自然といえよう。また中華人民共和国が成立してから、男女平等の思想が提唱され、男女の評価基準が統一されたこともあげられる。さらに夫婦で働くことは生活レベルを維持するためにも必要である。しかし、それには親のサポートが不可欠である。「80 后」女性たちのインタビューからは、出産後から自分の親に子どもを預けて働く姿も、また親世代のインタビューからは、一人しかいない孫の面倒を見るのも老後の生活の一部になっていることが窺われた。

「80 后」世代の結婚難の実情を探るために行った母親世代へのインタビューであったが、親世代と子世代の育った政治経済社会状況と結婚観のつながりも浮かんできた。母親世代は「大躍進政策」、「文化大革命」などの苦難の時期を経て育っている。兄弟姉妹もいる。結婚した1980年代前後、中国はまだ計画経済の時代であった。職業など政府によって配置され、個人の選択の自由は少なく、収入の平均主義が守られていた（徐安琪 2002：93）。そのため結婚相手の出身が重要で、配偶者選択の政治化、婚姻関係の階級化が存在し、中国の結婚文化の一つの歴史的な姿であったといわれる（徐安琪 2002：93）。このような母親世代がインタビュー結果で述べたとおり、子どもの結婚相手に仕事や経済力と思いやりを求め、自分の子どもが安定した生活を送れることを強く希望している。そしていまだに中国人にとって、「家屋」は「家」の存在を具体的に現す物と見られるという伝統的な儒教文化が強い（李曼 楊軒 2011：9）。そのため、結婚時、新居が必要とされる。親の世代の社会主義計画経済では国有企業などの職場が住宅を分配していた。また、物質の条件に限りがあったので、親の世代の中で結婚後男性側の親と同居した人も多かった。しかし、改革開放で市場経済化が進むとともに、生活の条件が良くなり、現在多くの若者は結婚後親と別居することを希望している。また、1998年から住宅分配制度がなくなると、都市の若者たちは自分の収

入よりも高い家屋を自力で用意する必要に迫られるようになった。母親世代は娘の相手に新居を購入する経済力を求めている。しかし現実には子ども夫婦が自分たちで高い結婚コストを負担するのは難しく、親たちが長年の貯金をはたいて子ども夫婦の新居購入を経済的に援助する。またインタビューで明らかになった通り、母親世代は子どもの結婚後には子ども夫婦の家事を手伝い、孫の面倒をみることも生活の一部になっている。インタビューでは老後のことまでは扱わなかったが、社会保障制度が安定した老後を保障してくれるという実感は薄く、子どもに老後を頼るという考えは中国社会にまだ根強い（朝日新聞 2012年5月20日）。このような状況で親世代は子どもの結婚を経済的・物理的にサポートするとともに、干渉していることがわかる。第3節で示した「父母相親団」がブームになっているゆえんである。

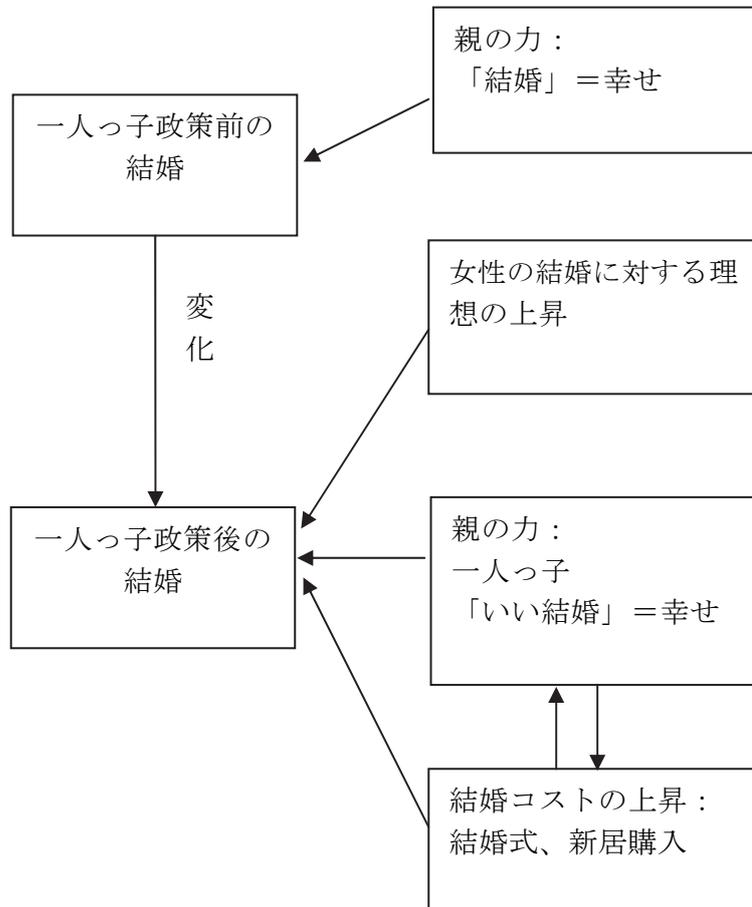
一方、インタビュー調査の中心となった30歳前後の女性たちは1980年代に生まれ育った一人っ子政策下の第一世代「80后」である。若林（2005：228）によると、中国一人っ子の親たちは子どもに対して過度に溺愛し、注意し、保護する「子ども至上主義」が氾濫している。幼少期からずっと親の愛を独占し、生活条件に恵まれている一人っ子は親と絆が強く、物心ともに親に依存しているという。そのため上海の「80后」女性たちは「自由恋愛」、「自由結婚」を尊重しているにもかかわらず、結婚相手を決める時、親の意見を重視する。親には逆らい難いという「80后」女性の声は強かった。

上述の分析から、現在上海における結婚の実態を図2のようにまとめることができる。まず、結婚は「一人っ子政策前の結婚」と「一人っ子政策後の結婚」に分けられる。ここで、「一人っ子政策前の結婚」というのは80年代前後の結婚のことを指す。その時代、結婚適齢期を迎えていた人たちのほとんどに兄弟姉妹がいた。本稿でインタビュー対象とした親世代、現在50-60歳の人たちである。「一人っ子政策後の結婚」というのは現在、第一世代の一人っ子「80后」である。また、「80后」世代の結婚には女性の結婚に対する理想の上昇、結婚コストの上昇、そして親の力、という3つの要因が大きく影響している。

自分自身が高学歴、高収入を持っているという女性が増えるとともに、無意識に結婚相手の条件も高くなっている。また、現在の結婚に対して、親の力が強い。一人っ子政策前の結婚の時代も、親の力は強かったが、子どもが結婚すると、幸せになるということが一般的な考えであった。一方、現在の上海の親たちは子どもが結婚することのみを追求するのではなく、「いい結婚」ができることを求めている。「いい結婚」の条件というのは、ひとつは物質的・要求である。結婚前に比べ、結婚後に物質的・生活水準が少なくとも悪くならないということが親の基本的要求である。そのために親たちは子どもの結婚相手に自分の子どもが安定した生活を送れる経済力を求めている。それは自分の老後の保障につながることもである。もうひとつは精神的な要求である。子どもが、家柄が釣り合い、思いやりのある人と結婚するということが多くの親の希望である。そのため、上海の親たちは子どもが「いい結婚」ができるように、子どもの結婚相手の選択から結婚後まで様々な援助をする。特に、結婚相手を選択することに多くの意見を出す。しかし、このような親の援助は無意識に子どもの「自由結婚」への干渉にもなっている。さらに、上海の「結婚コストの上昇」（結婚式、新居購入）は間接的に結婚に影響をもたらし、「自由結婚」が難しくなっている。若い男性は、高くなった結婚コストが負担できない人が多い。そのために結婚が遅れ、高くなった結

婚コストを親に負担してもらうことによって、さらに親が子どもの結婚に干渉する無意識的な力が強くなっている。

図2 上海における結婚の実態



インタビューの結果より作成

6. おわりに

本稿は中国都市における女性の結婚について、統計とメディアからの情報を整理し、上海においてインタビュー調査を実施することから、結婚難の実態とその要因を探った。本稿のインタビュー調査は、アンケート調査やメディアに描かれた一人っ子世代の結婚の特徴をより具体的に示すという結果になった。さらに「80后」女性とその母親世代が置かれた政治経済的状況と、彼女たちの結婚と夫婦・親子関係をめぐる思いを浮き彫りにした。

冒頭に示した日本の未婚・晩婚化に影響を及ぼす要因と比較してみれば、中国の男性の結婚難は一人っ子政策による男性過多が原因で、まず人口学的要因が大きい。しかし、都市の女性の結婚難についていえば、人口学的要因よりも、日本と同様に社会経済的要因や結婚規範が結婚市場に影響しているといえよう。まず高学歴化が都市の女性によりよい仕事と高収入をもたらすと同時に、仕事の成功と高収入は女性の経

済・精神的な面で独立させ、満足感をもたらした。高学歴者は低学歴者より結婚に対して慎重である（杜双燕 2008：51）といわれる通り、理想的な配偶者に恵まれなければむしろ独身のまを維持すると考えている女性が増えている。都市で結婚適齢期を迎えた「80后」女性は80-90年代という改革開放政策後の安定した成長経済という環境に育ち、親や祖父母から溺愛され、いい生活条件に恵まれて育ってきた。結婚や配偶者に対して理想が高すぎる「80后」女性が多い。「自由恋愛」、「自由結婚」と流行っている社会の下でメディアの影響をうけた「80后」女性たちはロマンチックな愛に憧れているとされる（張樂 2007：8）。それでいて結婚相手に自分と同じレベルの仕事や経済力を求める高学歴・高収入の女性たちは、経済力以外に思いやりと理解を兼ね備えた理想的な「白馬の王子様」の出現を待っているのである。第3節に述べた都市における「余女」の氾濫の現状は「高学歴化」が引き起こした女性の結婚難のありさまといえよう。

さらに結婚式や新居などを含むコストの上昇も結婚を容易にはしていない。中国の経済発展とともに結婚時の「三種の神器」は「家屋、家屋の内装、車」となった。「無房不婚」は現在の都市における若者のそして親たちの常識とまでなった。結婚後親と離れて住むことを希望するものの、1998年から住宅の分配制度がなくなると、都市で自分の収入よりも高い家屋を自力で用意することは至難の業となった。若い女性は非常に高い結婚コストを支払ってくれる人を待ち、若い男性は自分の収入よりも高い結婚コストに悩んで結婚を遅らせる。このような状況の中で「80后」の親たちは資金を提供する意味でも、子ども夫婦の結婚後の家事・育児をサポートする面でも、強いては自分の老後を考える上でも影響力が大きくなり、子どもの結婚に干渉する事態が起こっている。中国の都市において子どもたちは親との絆が強く、物心ともに依存している現状が「自由恋愛」を難しくしているのである。

一人っ子政策をめぐる中国特有の歴史的文化的経緯があるものの、都市の結婚の実態は第2節に挙げた東アジアや日本の状況とさほど遠いものではない。中国都市の「余女」、日本における「負け犬」、韓国の「老処女」を同様の現象として扱い、儒教文化の影響を問う研究もある（酒井 2009）。晩婚化が進み、女性の高学歴化と社会進出が進むなかで、「結婚=出産」やジェンダー規範はいまだに強く、親との関係性が結婚に影響するという点でも共通点が多いのではないか。

[注]

- (1) 「上山下郷運動」とは1968年以降毛沢東の指導によって行われた青少年の地方での徴農（農作業への従事を義務づけたこと）を進める運動であった。「上山下郷運動」は都市部の青年に農村で肉体労働を行わせ、思想改造を促すことにより、社会主義の国の建設に協力させることを目的とした（虞萍 2008:84）。
- (2) 調査対象者の人数は男性27,836名、女性22,548名である。その中で、未婚者は67.3%、離婚者は30.0%、配偶者が死亡した調査対象者は2.7%である。調査対象者の年齢は20-60歳、平均年齢は31.6歳であり、全員の調査対象者の中で20-21歳の人は5.0%、22-26歳の人は29.5%、27-31歳の人は26.1%、31-36歳の人は13.4%、37-41歳の人は10.9%、41歳以上の人は14.9%である。この中で80后は22-31歳にあたり、55.6%を占める。また、大学の学歴以上の比率は43.5%に達する（百合網 2012:6）。

付記

本稿は丁奕春の麗澤大学大学院言語教育研究科・比較文明文化専攻修士論文「中国の都市における結婚難—上海の事例を中心として—」（2013年1月提出）の4章～6章を中心にまとめたものである。インタビュー調査に協力して下さった上海 Toastmaster Club のみなさんに心から感謝します。

参考文献

<日本語文献>

- 阿藤 誠「超少子化の背景と政策対応」pp. 1-16『少子化時代の家族変容：パートナーシップと出生行動』東京：東京大学出版会 2011
- 大橋照枝『未婚化の社会学』東京：日本放送出版協会 1993
- 河野稠果『人口学への招待：少子・高齢化はどこまで解明されたか』東京：中央公論新社 2007
- 黒須里美「皆婚社会から非皆婚社会へ」pp. 16-29 満田久義、青木康容編『社会学への誘い』東京：朝日新聞社 1999
- 虞 萍「現代中国の都市における女性の婚姻意識と新ライフスタイル—『中国婦女報』を手がかりに」現代中国研究 第22号：80-94 2008
- 酒井順子『儒教と負け犬』東京：講談社 2009
- 佐藤博樹、永井暁子、三輪哲編『結婚の壁：非婚・晩婚の構造』東京：勁草書房 2010
- 徐安琪著、東 美晴、角田幹夫、張一梅訳「中国上海における恋愛と結婚」社会学部論叢 第13巻大1号：85-128 2002
- 張 萍「中国における出生力低下の経済的・社会的要因—人口高齢化の背景についての分析（2）—」『社会学部論集』第48号：1-18 2009
- 津谷典子「未婚化の要因：ジェンダーからみた学歴と雇用」pp. 19-44 阿藤誠ほか編『少子化時代の家族変容：パートナーシップと出生行動』東京：東京大学出版会 2011
- 山田昌弘『結婚の社会学：未婚化・晩婚化はつづくのか』東京：丸善 1996
- 山田昌弘『少子化社会日本—もうひとつの格差のゆくえ』東京：岩波書店 2007
- 若林敬子『中国の人口問題と社会的現実』京都：ミネルヴァ書房 2005
- 「ルポ チャイナ 婚活メンツ競う親」『朝日新聞』（日刊）13版 2012年5月20日 朝日新聞社 2012

<中国語文献>

- 曹学梅「上海“剩女”群体產生的城鄉互動解釈及其择偶偏好研究」華東師範大学 資環学院人口研究所 2010
- 杜双燕「“单身”熱潮的 sociology 解析」『西北人口』2008年 第5期 第29巻：49-54
- 鄧 森「対当今“剩女”現象的倫理反思」研究 湖南師範大学 2011
- 李樹茁「中国的男孩偏好和婚姻挤压—初婚与再婚的市場綜合分析」『人口与經濟』2006年 第4期：1-8
- 李建新『中国人口結構問題』北京：社会科学文献出版社 2009
- 李 曼、楊 軒「当前我国城市“80后房奴”現象探析」『決策与信息』2011年 第12

期 総第 84 期:9-10

張 楽「現代都市“剩女”現象的社會学透視」『山西青年管理幹部学院学報』2007 年
第 4 期 第 20 卷:8-10

張 翼「中国当前的婚姻態勢及变化趨勢」『河北学刊』2008 年 第 3 期

<http://www.docin.com/p-124746679.html#>

「調査称：逾两成城市青年因住房压力晚婚晚育」『黑龍江金融報』2011 年 第 6 期

「2011 中国人婚恋狀況調查報告」百合網 (baihe.com) 发布 2012

news.baihe.com/weibo/2011report.doc

「父母相親会淪為“独角戲”凸顯抵偶觀代際衝突」中国新聞網 2010 年 5 月 30 日参
照

<http://www.chinanews.com/sh/news/2010/05-30/2312150.shtml>

「上海“父母相親团”火爆折射“婚恋焦慮”」光明網 2012 年 2 月 15 日参照

http://life.gmw.cn/2012-02/15/content_3580472_2.htm

「曝上海房價收入比達 82.27」光明網 2012 年 2 月 15 日参照

http://house.gmw.cn/2011-02/15/content_1613131.htm

